



「日本語音声談話の韻律構造」

佐々木(原)香織

審査結果の概要

この論文では、日本語の談話における韻律構造を分析対象とし、具体的分析結果をもとに理論的に展開している。

論文冒頭では、これまでのイントネーション研究及び談話研究史を踏まえた上で、特に談話におけるイントネーションの重要性を示した。次に一例としていわゆる「尻上がり」イントネーションの詳細な音響的分析を行い、社会言語学的視点から位置づけた。後半では、日本語の句末イントネーションの統計的手法による類型化を行い、各談話に現れる句末イントネーションの型の分布状況を明らかにした。また、「話調」を「談話全体に現れる韻律的諸特徴の合成としての音調」として再定義し、これを科学的に解明することを提唱した。

この論文で、イントネーションを含む韻律的諸要素を、音響的手法により分析し、因子分析・判別分析を適用するという新視点を打ち出し、かつ「話調」という概念の提唱に至った功績は大きい。談話全体にかかわるような長い音声単位について、科学的に実測可能な、実在性のある現象として取り上げた。因子分析・判別分析の適用により、客観的基準がえられたことが重要である。談話の社会言語学的分析という新しい研究分野への着実な足がかりを得たといえる。本論文は、問題意識・分析手順・発見・将来性などの点について、博士号取得にふさわしい業績である。

研究の位置付け

本研究では、いくつかの点において、従来のイントネーション研究にない新しい手法・視点が適用されている。以下では本研究を特徴づけるキーワードをもとに、整理しつつ評価する。

イントネーション研究史上の位置

言語学的な分析は、20世紀前半以来、音韻のような短い単位から始まり、その後単語や文法にまで研究が進んだ。ただし音韻に関わる分野でも、イントネーションの研究は、立ち遅れていた。これまでのプロソディー(韻律)記述の中には、内省による主観的分析に頼るものがあった。し

かも典型的な平叙文・疑問文などの、単文を発話した場合のみの記述が主体だった。最近は、言語の韻律の研究としては、文のイントネーション研究までは行われてきており、文構造と文イントネーションの関係、話者の意図表現や感情表現と文末イントネーションの記述なども進められている。

しかし、まとまった発話全体、つまり談話のプロソディーについての記述はまだほとんど行われていない。談話レベルのプロソディー研究としては、話速、ポーズの現れ方、あいづちなどについて部分的な分析は行われているが、談話のスタイルの総体を特徴付ける話調について記述しようとする試みはなされていない。

論文冒頭の学説史的位置づけでは、日本語イントネーション研究史を3期に分け、独創的な着眼点から、適切に記述されている。

談話録音資料の音響分析

この研究は、修士論文で取り上げたいわゆる尻上がりイントネーション（または、語尾上げ語尾伸ばし、女子大生口調、ぶりっ子口調、昇降調）を出発点にしたものだが、その後研究の視野が広がり、日本語文末イントネーション全体を扱うことになり、しかも音の上昇下降のみでなく、他の韻律的特徴まで取り入れた「話調」という広い概念にまで踏み込んだ分析になった。韻律を幅広くカバーした、優れた研究に発展した。

このような「談話分析」の場合に必要なのは、談話全体のプロソディー、話調の記述である。談話の話調を比較・対照するには、客観的な分析方法、記述の方法が必要であり、それを明かに提示することが求められる。

この研究で、実際の発話の録音資料を使って、談話の中のイントネーションを取り上げたのは、すばらしい成果である。ことにいわゆる尻上がりイントネーションを研究の出発点にしたために、文末のみでなく、句末に臨時的にかぶさりうる音調についての記述ができた。これによって問題意識が整理され、類型記述が整った。

社会言語学的なレベルにおいて言語使用を分析しようとする場合には、談話の話調を客観的に記述するということが必要となる。佐々木さんが例として取り上げているように、いわゆる「尻上がり」の話調はそのイントネーションが特徴的であるとされたが、実際に分析してみると、イントネーション自体はそれほど特殊なイントネーションではなく、そのようなイントネーションが頻発する談話の話者や場面に聞き手が反応していたということがわかる。社会言語学的にみて、「ブリッ子」口調というのは、新しい話者のグループによる、物言いに対する保守的な聞き手の

反応である・・・というような分析が可能となる。

音響分析の適用

本論文は、録音された具体例を音響分析にかけ、その数値に多変量解析法を適用した点は、方法論的に大進歩を示すものと言える。

これまでは、このような話調の韻律の分析は技術面でかなり困難であったばかりでなく、談話音声の韻律特徴として、どのような要因を捉えるべきかについても解明されていなかった。しかし今回、佐々木さんの研究成果により、談話の話調を特徴付ける要因が明らかにされ、その具体的な分析方法が示されたことは、大いに意義がある。

基本周波数やインテンシティの測定、その正規化など非常に手間がかかっていることがわかる。「音声録聞見」は1989年に、音声の基本周波数抽出に特化された音声分析用ソフトで、当時は画期的なF0値分析ツールであったが、現在では、「音声録聞見」自体がウインドウズで起動するようになっており、操作性もよくなっている。また、それ以外にも音声分析用ソフトが利用できるようになっており、談話の韻律分析も効率よく実施することができるはずである。近年の急速な技術的発展によって、談話音声の音響的分析も可能となっており、談話のプロソディーの記述・分析を研究テーマとすることは不可能ではなくなっている。しかし、このように音声分析ソフトが普及したのは、極めて最近のことであり、佐々木さんの取り組みが無駄なことというわけではない。当時の大変な苦勞をいとわず、大量の話調データの韻律分析に取り組み、要因の因子分析・判別分析が可能であることを示した研究成果を高く評価したい。

佐々木さんの研究成果に基づいて、今後、談話レベルの韻律の記述・分析が進められることになるだろう。そして、佐々木さんによる談話の話調の記述・分析についての検証が進むことになるだろう。この研究は、まさに時宜を得たものであり、韻律研究に新しい局面を切り開く意義深い研究であると言える。

多変量解析法の適用

佐々木さんの研究においては、単純に因子分析を適用したにとどまらず、判別分析を適用した。その際に音の高さの変動に関するいくつかの音響学的計測値を入力したが、その選択が適切だったことは、結果がきれいに判別されたことに示されている。適切な計測値に着目しないと、判別がうまく行かないことが、実際に多いのである。これには経験と名人芸的な洞察力が必要である。本研究においては、いわゆる尻上がりイントネーションの特徴を音響学的にとらえるための先行

研究を踏まえているために、うまくいったと、考えられる。判別分析の結果、句末イントネーションは平調、上昇調、強調、昇降調、下降調、停滞調の6種に分類された。

佐々木さんの研究においては、発話の句末のイントネーションを分析し、平調とそれ以外のイントネーション・パターンの出現割合、話速、ポーズの長さなどによって、談話の話調の記述ができることを示しており、句末イントネーションを談話の話調を特徴付ける要因としていることである。これまで、句末イントネーションを談話の話調の要因として位置付けた研究者はいないだろう。

プロトタイプ（原型）理論の適用

尻上がりイントネーションの分析ですでに問題となっていたのは、聞き手によって判断が違い、感じ取り方が違うような、中間的なイントネーションの存在だった。イントネーションが連続的なものでなく、音素と同様に離散的な認知単位だとしたら、あるイントネーションの存在と非存在に2分されるはずで、中間的な反応はないはずである。この問題を解決するために、佐々木さんは、言語学で話題になっているプロトタイプ（原型）理論の適用を考えた。イントネーションの具体的な音響的分析結果に本格的に適用されたのは、恐らく初めてで、理論的難点を乗り越えるのに役立った。

話調への理論的発展

これまで日本語研究で、談話全体への独特のフシ付けとして、「話調」という用語は提案されていた。一般的な言い方で表せば、言葉調子、口調などとも言える。ただし具体的に音響分析結果に基づいて記述する試みはなされていなかった。佐々木さんは、第1章で「話調」を「ある談話場面における話者の何らか意図・情緒の表現に関わる、談話全体に現れる韻律的諸特徴の合成としての音調」と再定義した。本研究ではまず句末イントネーションの出現状況を分析した。イントネーションの分布以外にも、談話の調子を形成する要素であると考えられるポーズや発話速度、ピッチレンジなどに関しても、談話資料ごとに個別に検討した。それ以外に、談話の話し手・話し方の特徴に着目して、「ニュース調」や「流暢な司会調」、「高校生っぽい談話」などの「話調」などが、特徴づけられた。

さらに話調に関して、実際に扱った談話資料と文体との関係をグラフの形で、理論的に位置付けた。将来データを加えることで、談話の類型化がさらに進み、それに伴って話調の認識もより正確になることが期待される。

佐々木さんは本研究では、「イントネーションを単なる記号として捉えるだけでなく、談話という社会的な文脈において捉えようとした」というが、成功を収めたといえることができる。

将来の課題

談話の話調については、さらに、幅広い談話を分析対象としてみる必要がある。また、多くの聞き手による聴覚実験を通して、確認する必要があるだろう。話調の評価実験なども考えられる。例えば、外国人日本語学習者の発話が日本人にどのような印象を与えているのか、その原因はどのような韻律特徴にあるのかとか、日本語の方言別に、それぞれの方言の韻律特徴がどのような聴覚印象を与えるのかというような調査も興味深い。さらに世界各地の英語に文中の上昇調が、*Australian Questioning Intonation* とかカリフォルニアの *Uptalk* などという名で広がっている。外国語教育場面でよく使われる相手の理解・正解をうながすための上昇調との関係なども興味深い。

このように、今後分析対象がさらに広がることが期待される。1990年代の女性に広がったいわゆる半疑問（半クエスチョン、擬似疑問、文中疑問）イントネーションについても、研究がいまだ不十分である。イントネーションの社会言語学的研究は緒についたばかりで、研究者の層も薄いので、本人自身が実地調査に乗り出すことが期待される。また佐々木さん自身が課題として掲げているように、「話調」の通時的研究も無視し得ない課題である。本論文中で社会の変化、人々の言語生活の変化、女性の地位向上との関係に言及しているように、時代的変遷の理由も、明らかにされるべきだろう。

また「話調」の周辺に位置する「口調」や「話し方」も、感情的、主観的に扱われる傾向があったので、今後音響的分析の対象に取り込む必要がある。

本研究におけるプロトタイプ理論の適用は効果的だったが、以上のような分析資料拡大を踏まえて、さらにプロトタイプのとらえ方を展開させる可能性が出てきた。今後の発展が期待される。